北海道のアンモナイト研究に一生を捧げた

松本達郎の生涯

松本達郎は、1913年11月2日に、心理学者の**松本亦太朗**（1865～1943）の三男として生まれました。旧制静岡高校で地質学者の今野円蔵の指導を受け、さらに地質学を学ぶために、1933年に東京帝国大学に進学し、本州や九州の地層の研究を行いました。

松本は、大学院進学後には、古生代のオウムガイ類や三葉虫類を研究していた、**小林貞一**の指導を受けるはずでした。しかし小林は、その時期にアメリカ留学が決まってしまい、代わりに松本を指導したのは、東北帝国大学教授の**矢部長克**でした。矢部は、1904年に異常巻きアンモナイトの**ニッポニテス**を命名するなど、北海道のアンモナイトの研究に長く携わっており、松本も、その矢部の元で、北海道のイノセラムスやアンモナイトの研究に取り組むようになりました。以来、松本は、九州大学を定年退官した後も、2009年に95歳で亡くなる直前まで、研究を続けました。

また松本は大学教員として、多くの学生を育てました。そして、松本の教え子たちは、アンモナイトに限らず、古生物学の様々な分野で活躍することになります。

松本 亦太郎
1865年11月3日〈慶応元年9月15日〉～1943年12月24日。立教学校（現・立教大学）教授、京都帝国大学教授、東京帝国大学教授を歴任。帝国学士院会員。1927年に日本心理学会を創設し、初代会長になるなど、日本の心理学の基礎を築いた。画像は東京大学Webページより引用。

小林 貞一
1901年8月31日～1996年1月13日。東京帝国大学・東京大学教授。日本古生物学会第9代会長。日本学士院会員。研究対象は頭足類・三葉虫から造山活動まで多岐に渡り、日本古生物学会が出版した英文学術雑誌「日本古生物学会報告・記事」と、和文学術雑誌「化石」の創刊にも尽力した。画像は矢島(2010)より引用。

矢部 長克
1878年12月3日～1969年6月23日。東北大学教授。日本古生物学会初代・第8代会長。ニッポニテスをはじめとする、北海道のアンモナイト研究のほか、哺乳類化石から恐竜足跡化石まで、多様な化石の研究に取り組み、日本の古生物学の黎明期を支えた。画像は矢島 (2010)より引用。